

驚くべき風習が残っていたタイ国の奥地メサレン

古川 久彦

もう30年近くも前のことで詳しいことは忘れてしまったが、度重なる外国旅行の中でもメサレンの旅ほど強烈な印象として残っているものはない。忘れようとしても忘れられない程の驚きに、ここでは記憶を辿りながら書き残すことにした。

東南アジアの特産調査

その当時、国際協力事業団のプログラムに東南アジア特産林産調査という事業があった。これは、日本のきのこ生産の技術を東南アジア諸国へ導入して、当該国の産業振興に寄与しようとするための事業で、そのための事前調査が目的であった。その頃私は国立林業試験場のきのこ科長の職にいたので調査団の団長を仰せ付け、他の3名の団員とともにシンガポール、マレーシア、タイの3ヶ国を訪問し、相手国の政府の高官と協議をするとともに、現場を訪れてきのこ栽培に必要な環境条件などについて詳しく調査したのであった。私は今までも国際学会などで外国へ出掛けたことは度々あったが、この時は公務の上に日本を代表する調査団と言うので飛行機もファーストクラス、特別なサービスを受けながら勇躍として出掛けたものである。

シンガポールとマレーシア

最初に訪れたのはシンガポールである。ここでは主として農業試験場で試験的に栽



正装した山岳民族の女性

培していたマンネンタケやキクラゲの栽培現場を視察した後で関係者と懇談したが、日本の栽培技術の導入とシイタケの優良品種の菌株の譲渡を強く望まれただけで、その他には特に注文はなかった。翌日、この地には世界的にも有名な植物園があり、とくにラン科植物では世界一の蒐集数があると聞いていたので、この機会にと思い先ずここを見学した。そして、ここに併設されている博物館には、イギリスの有名な菌学者コーナー博士や当地の菌類分類学者チャン女史が残されたきのこの標本類が保管されており、さすがに菌学の大先生の偉業だけに見応えのするものばかりであった。

つぎに訪れたマレーシアは、ゴムの世界的な生産地であるだけに、きのこ産業への関心は少なかった。政府高官との協議の席では、きのこに関する要望よりもむしろ桐

材の生産技術と竹材加工の技術指導の要望が強かった。これもやはりお国柄であり、同じ東南アジア諸国の中でも他国と異なった産業振興を考えていることが伺えた。

バンコクに着く

最後に訪れたのはタイ国である。バンコク空港まで出迎えに来てくれた愛弟子トリラタナの笑顔に会って、何となく心休まる思いがしたものである。彼女はチュラロンコン大学の教授で、私が国立林試在任中に留学研究員として1年間私の研究室で勉強したことがある熱心な菌学者である。バンコクでは、政府の高官との間できのこ生産技術の導入などについて協議したのち、チュラロンコン大学の学長の要請で彼女の研究課題の指導や、助手や学生たちにきのこ育種学の講義を行った。また、学長からは彼女の日本滞在中についての丁寧なお礼の言葉があり、また後日私を当大学の教授に招きたいとの有難いお話まで載せて恐縮した次第である。バンコクには1週間ほど滞在したが、その間彼女は朝晩ホテルに電話をかけてくれて、私の体調を気使い食事など細かい点にまで気を使ってくれた。このような彼女の献身的な気配りに、異国の地に優れた弟子を持ったことの誇りを強く感じたものである。

チェンマイからチェンライへ

バンコクでの調査と協議を終わってからチェンマイに飛び、ここで1泊。この地は気象条件がきのこの栽培に適しており、彼女の指導で小規模ながらシイタケの菌床栽培が行われていた。翌日、最後の調査地メサレンへ向かって出発した。朝早くチェンマイ空港からチェンライ空港に向かって7人乗りの小型飛行機に乗り込んだ。延々と続くジャングルの上を樹海すれすれに飛行機は飛ぶ。ガタッと音がして飛行機が揺れるたびに、今にも落ちるのではないかと気

遣いながらのスリルを初めて味わった。チェンライ空港は、空港といっても只の平坦な草原、凸凹した滑走路へガタガタと大きな音とともに着陸、田舎の凸凹道を荷車に乗って走っているような感じであった。ここから用意されたジープに乗って走ること4時間、ジャングルを抜けては谷を渡り、再びジャングルに入っては谷を渡る、悪路は容赦なく尻を叩く、耐えかねて中腰になって痛さに耐えていたことを憶えている。

メサレンの集落と酋長との出会い

暗闇の中にぼんやりと見えていた小さな小屋に着いた頃は、辺りはすでに闇の世界だった。何処からともなくガヤガヤとした声とともに、数人の人が集まってきた。ここが終着のメサレンで、集まってきた人たちはこの地に住む山岳民族と中国系の原住民であった。中国系の人たちは、その昔中国の軍隊がビルマに攻め入った時に、多くの軍人はこの地で最期を遂げたと言い伝えられており、その末裔が今の原住民であるという。ここは定住人口は僅かながらも一つの王国を成しており、酋長が君臨していた。同行した通訳の勧めで、まず酋長に挨拶に行く。これは、酋長に対する外来者の礼儀だという。そして、これをしないと後で厄介な問題が生ずることがあるという。

酋長の家は他の原住民の家と違って、この地にしては立派な作りだった。丸太を上手に組合わせた椅子に勧められて座ると、コップ1杯の水が出された。病原菌や微小動物の危険があって生水は絶対に飲む事が出来ないこの地では、飲み水が最高の接待である。相手の気持ちを察して出してくれたものには必ず口を付けると教えられていたので、私は恐る恐る口をつけた。酋長は、私に対してお前の一番大切なものを預けるという。旅行者が一番大切にしているものといえば、それはやはりパスポートである。

私は酋長にパスポートを差し出した。酋長は丁寧に受け取ってから、大きな手を差し出して握手を求めてきた。私もこれを受けて握手を返した。これはこの王国の一つの儀式で、私にとって最も大切なものを酋長に預けたことによって二人の間に信頼関係が成立したことになるのだという。つまり、私がこの地に滞在している間は、酋長が責任を持って私を保護するというのである。文明文化から遠く離れた山奥に、これ程までに人と人との絆を大切にしている社会があることを知って、何かほのぼのとしたものを感じたものである。恐らく、私に提供してくれた小屋の周りを誰かが夜を通して寝ずに警戒してくれたのであろう。小屋は草葺の隙間だらけの家で、夜間は野獣に襲われる危険は充分にあった。それに加えてこの地の川の水は非常に澄んでいたが、所々に汚水の溜りがあってボーフラの発生が多かった。したがってマラリアの感染が心配で、夜も落着いて眠ることが出来なかった。もしも酋長との間に信頼関係が成立していなかったら、恐らく私は無事に帰ることが出来なかったかも知れないと後で思ったものである。



山岳民族の集落

メサレンの食べ物と朝市

滞在中の食事は、彼らが普段食べているものと同じものが出された。腐敗臭のする卵、カビの生えた豆腐、真っ黒い色をした鳥肉などで全て珍品ばかり、始めはなかなか

口に入らなかったが食べてみると味は上々、とくに黒色の鳥肉は格別に旨かった。聞けば黒色鳥肉の料理を客に出すのは最高待遇の証であるという。カビの生えた豆腐は、中国の奥地では好んで食べているらしい。カビの作用によって旨味成分が産出されるので、人為的にカビを生やしてから食べる習慣があるという。微生物を仕事にしている私としては、このカビの一片を持ち帰りたかったが、残念ながら培地の用意が無かったので諦めた。悪臭が漂う卵にも挑戦したが案の定翌朝はすごい下痢、正確な原因はわからないがこれだけは曲者だと今も思っている。

或る日の早朝、酋長が私を起しに来た。まだ薄暗いのに一体何が起ったのだろうと聞いて聞くと、週に1回の朝市があるから見に行こうと誘われた。運が良ければ野生のきのこが店先に出ているかもしれないという。丁度良い機会と思い早速身支度を整えて出掛けた。王国の中心地と思われる小高い丘の上に、村人が集まっている。それぞれ我が家の畑で採れた野菜や、庭先で飼っていたニワトリや、中にはブタの片足まで並んでいる。この地では通貨は無く、すべて物々交換で取引されているという。たとえば、自分の畑で採れた野菜の一把と、相手の庭先で飼っていたニワトリの片足と交換するという具合に。残念ながら野生のきのこは見当たらなかった。

メサレンの暮らし

この地は例のトライアングルに程近いところで、一つ山を越せばもうそこは隣国ミャンマーである。ここの山岳民族は、昔から焼畑農業といって原野や森林に火を放って焼き払い、その跡にケシを植えて麻薬アヘンを採って暮らしていた。今はタイ国政府の指導でケシの栽培は禁止されているが、まだまだ違反者は後を絶たないという。山岳民俗の部落を訪ねたとき、働いているの

は女性ばかりで男性が見えない。不思議に思って聞いてみると、なんと男は昼間からアヘンを吸って寝ているという。この部落は男の天国であり、男尊女卑の世界である。奥深いこの地にも、少しずつ近代文化の風が吹き込んでいる。その証拠に、裸足で遊んでいる子供の中に1人だけ真新しい靴を履いている子供を見かけた。おそらく都会から訪れた人の贈り物であろうが、この地にも文明の足音が近くまで来ているのかも



山岳民族の女性たち

しれない。私は僅か2週間の滞在であったが、その間彼らと生活を共にして原始的ではあるが世界の文明国よりも一足早く文化の原点を採り入れていたのではないかとと思われることを発見した。それはトイレである。中国の田舎のトイレは前面の扉は無く、しかも汲み取り式である。だからよほど注意して使わないと、落とした勢いで跳ね返ってくる事がある。しかし、メサレンのトイレは違っていた。お粗末ではあるが周囲の囲いはしっかり出来ている。そして、コンクリート製の手造りの便器の横には、川から導いた小さな水溜めがある。事が終わると使用者は缶詰めの空き缶を使って水溜めから便器に水を移して流し捨てる。もちろん、下水処理施設が有るわけは無く、そのまま川へ流されることになる。放流されたものは、何百キロという長い距離を流れる間に動植物や微生物の作用によって浄化

され、やがては清浄化されるのであろう。この方式は、造りは粗末で手作業ではあるが、近代的な水洗トイレの原型ともいえるのではないだろうか。裸司様の身支度で原始的な生活を送っている彼らの意識の中には立派な清潔観的理念が備わっていたのである。

驚くべきメサレンの風習

彼らの日常生活の中には、われわれ文明に囲まれて生活している者から見ると、異様にしてかつ驚くような風習が未だに残っていた。その一つを紹介しよう。一般に貧しい生活を送っている地域ほど子供の数が多いと言われている。今までに訪れた何れの国でもそうであったが、奥地の部落に立ち寄ると真っ先に集まって来るのは多くの子供たちである。ところが、メサレンの山岳民族の部落は少し違っていた。もちろん子供は集まってくるがほんの数人で、部落の住民人口からみれば非常に少ない。不思議に思い通訳を通して聞いてみた。人間の生殖能力は、種族によりまた生活様式によって異なるという。この部落の種族にはこのような特異性があるのかも知れないが、話の中で驚くような事実がある事を知った。

お産というのは、女性にとって非常に大きな仕事であることは万人が知るところである。妊娠を知ってから妊婦の生活は、常に胎児の正常な発育を願って万事安全を期することは言うまでもない。この事は、国が違い種族が異なってもなんら変わる事はない。しかし、いざ出産となるとそれぞれ特異な風習があると聞いていた。近代的な病院で出産する場合は別として、僻地での出産はその土地の慣習に従うのが通例だという。メサレンの山岳民族の場合は、妊婦が産気付くと一人でジャングルの中に入って行く。そしてそこで出産して、後始末をしてから子供を連れ帰るといふ。この場合、もし双子が生まれた時は一人はその場に残し、他

の一人だけを抱いて帰るといふ。それは、この部落に残る古くからの伝説に、人間の出産は一人の子供を生むことであって、複数の子供を生むのは人間ではなく動物（野獣）であるという俗説が今でもなお信じられているからだといふ。一方では宇宙旅行が出来るという時代に、地球の片隅ではこのような非人間的な風習が残っているこの現実を、私たちはどのように受け止めるべきか頭を抱える問題である。

日本軍が残した足跡

ある日の事、突然曾長が「白骨街道」へ案内すると言いだした。「白骨街道」という意味が解らないので、聞いてみると意外な事実が判明した。それは戦時中の出来事である。日本の軍隊が旧称ビルマからタイに向かって進駐してきた時に、前進部隊がタイの国境近くで軍用道路を造っていた。しかしマラリアと飢えのために全員が倒れ、屍は白骨化してその場に累々としていた。以来原住民は、この道路のことを「白骨街道」と呼ぶようになったといふ。朝早く曾長の案内で部落を車で出発、凹凸道のジャングルを抜けておよそ3時間後、雑草に深く覆われた平坦地に着いた。ここが「白骨街道」である。よく見ると、車の轍が微かに残っている。時々誰かが訪れているのであろう。あれから長い年月を経ているのでお骨は見られなかったが、所々に小さな祠が作られていて、手折られた数本の野草が祀られていた。見渡せば付近は鬱蒼たるジャングル地帯、気候条件も地理的条件もこの上もない苛酷なこの地で、当時の兵隊さん達はどんなに苦労したことだろう。日本を遠く離れ、残してきた肉親を想いながら逝かれた彼らの気持は察するに余りあるものがあつた。戦争の無惨さを知っている私は、寂しく咲いている野の花を手折って捧げ両手を合わせて立ち去つたが、未だに後髪を引かれる思いは消えていない。

バンコクを後にして

行きと同じ行程でバンコクに帰つた日、再びトリラタナが笑顔で迎えてくれた。メサレンの厳しさを知っている彼女は、私の体調を気遣つて夜も落着いて眠れなかつたと言つてくれたあの言葉は今でも忘れてはいない。その夜は彼女の家を招かれて、歯科医のご主人と二人の子供さんを交えて心尽くしのご馳走を戴いた。そんな彼女が数年後、病のために突然逝つてしまった。時々送られてきた彼女からの手紙の住所は大学だったのに、ある時自宅の住所に変わった事があつた。不思議に思つて問い合わせると、病を得て自宅で臥せているといふ。私は彼女を日本へ呼んで治療させようと考えその手筈を整えている間に、彼女は逝つてしまった。ご主人からの電話を受けた私は、思つてもみながつた事に愕然として暫らくは声も出なかつた。私は、今も彼女の冥福を祈らぬ日はない。



故 S. Triratana と筆者

世界中とは言わないが、主要な国々には足を踏み入れて、それもきのこを求めて秘境ばかりを歩いてきた我が人生の中で、これ程までに近代文明とかけ離れた因習が活きている世界＝メサレンの生活を体験して、文明発達の基盤はここに在ることを知る事ができたと思つている。そして、特にタイ国滞在中は骨身を惜しまずに尽くしてくれた今は亡き愛弟子トリラタナの御霊は、何時も私の心の中に納めてある。

(2005.05.15稿)